

富山県高岡市

守山城跡詳細調査概報
1

高岡市教育委員会

富山県高岡市

守山城跡詳細調査概報
1

高岡市教育委員会

序

守山城は、増山城（砺波市）、松倉城（魚津市）とともに越中の三大山城として広く知られ、富山県を代表とする山城です。守山城は、十四世紀半ばの南北朝期から戦国期を経て、十六世紀末の近世初頭に至るまで使われた城といわれています。また、天正十三年（一五八五）から慶長二年（一五九七）まで、前田利長が居城していました。

現在、守山城跡は高岡市指定史跡として保護されており、市民には「城山公園」として広く親しまれています。守山城跡は、高岡市の中世を考える上で大変重要な史跡であります。本書は、平成二十五年度から開始した守山城跡詳細調査の一部を概要報告することを目的としたものです。

平成二十六年度に高岡城跡が国の史跡になったことから、守山城跡にも関心が一層高まっていると思います。今後本書によって歴史の一端が明らかとなり、守山城跡に対する理解と関心が深まり、史跡として保護するための資料として活用されることにつながれば幸いです。

最後に調査の実施にあたり、高岡徹氏をはじめとする関係者の皆様から有益なご指導を頂きました。厚く御礼申し上げます。

平成二十七年三月

例言

一 本書は、富山県高岡市東海老坂地内ほかに所在する守山城跡の詳細調査概要報告書である。

二 調査は、高岡市教育委員会が平成二十五年度から実施し、文化庁の埋蔵文化財緊急調査費国庫補助金・県費補助金の交付を受けている。

三 調査事務局は、高岡市教育委員会文化財課に置き、文化財課長高田克宏が総括した。

四 調査は、高岡市教育委員会が調査主体となつて実施し、とやま歴史的環境づくり代表 高岡徹氏の協力を受けて、本書で報告する原稿としてとりまとめた。

五 調査は測量調査、史料調査、地中レーダ探査、関連城郭調査を実施した。

六 各調査においては必要に応じて業務委託を行つた。地中レーダ探査等の自然科学分析調査については、国立大学法人富山大學と高岡市が共同研究契約を結び調査を実施した。

七 本書の各図の指示は以下のとおりである。

・方位は座標北、国土座標第VII系に準拠する。

・水平基準は海拔高で、(m)で表示した。

・各図の縮尺は国内に示した。

・層図、表は章、節の順で番号を示した。

八 年次は和暦を基本とし、必要に応じて西暦を()で記した。

九 参考資料・文献等は各項末に示した。

十 一部固有名詞を除き、字体は常用漢字を原則とし、変体仮名は仮名に改めたが、助詞の「者」「与」「茂」「江」「而」などは

そのまま表記した。旧仮名の「ゐ」「ゑ」や、合字の「ぢ」「ゞ」などもそのまま表記した。

十一 本文中に登場する人物名は、すべて敬称を省略した。

十二 調査成果に関する資料は、高岡市教育委員会で保管している。

十三 調査の実施と本書の執筆にあたり、高岡市教育委員会文化財課職員の他、左記の方々より有益なご教示とご協力をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

《個人》

宇佐美 孝、金子節郎、金子征史、川畑謙二、川村 優、晒谷和子、坪利正一、西井龍儀、松崎文秀、山下信一郎、山本 泉

《団体・機関》

金沢市玉川図書館近世史料館、小松市教育委員会、小松市立博物館、小山町教育委員会、高岡市都市整備部都市計画課、高岡市都市整備部花と緑の課、富山県立図書館、八王子市教育委員会、二上連合自治会、宝應寺、南越前町教育委員会

敬称省略、五十音順

目次

序文	例言	
第一章 調査の経緯等	第一節 調査に至る経緯	第二節 調査の経過
第二章 立地と環境		
第一節 守山城跡の地理的環境	第二節 守山城跡の歴史的環境	
第三章 史料調査		
第一節 守山城主神保氏子孫の行方	第二節 描かれた守山城跡	
第二節 神保氏張の治水伝承	第三節 神保氏の墓所について	
第四節 旗本神保氏の墓所について	第五節 前田斉泰の二上山登山史料・補遺	
第四章 測量調査		
第一節 概要	第二節 向山屋敷等について	
第二節 地中レーダ探査		
第五章 地中レーダ探査		
第一節 概要		
第二節 本丸		
27	27	27
25	25	25
22	16	14
11	9	9
6	3	3
1	1	1

第六章 関連城郭調査	第三節 二の丸	
第一節 概要	第四節 まとめ	
第二節 成果		
第七章 総括		
第一節 各調査成果		
第二節 今後の課題		
附編 守山城関係年表		
35	35	35
33	33	33
32	30	

挿図目次

- 図 1 守山城跡調査位置図
- 図 2 守山城跡の位置
- 図 3 砥波平野周辺地形分類図における守山城跡の位置
- 図 4 二上山の地質
- 図 5 周辺の遺跡位置図
- 図 6 城山出土の宝鏡印塔実測図
- 図 7 『俳諧 多磨比路飛』に描かれた守山城跡の遠景
- 図 8 『多磨比路飛』に描く二上山一帯
- 図 9 守山城跡付近を拡大したもの
- 図 10 『多磨比路飛』に描かれた各地点
- 図 11 天正4年水害時の神保氏張による新流路開削概念図
- 図 12 神保氏張の治水伝承を記載する『御郡方有増覚書』とその該当箇所
- 図 13 神保氏張の下総国内知行所分布図
- 図 14 神保家墓所立体図
- 図 15 氏張墓の墓碑
- 図 16 守山城跡古図（富山県立図書館蔵 「嘉永五年四月五日二上山城跡立御登山御道筋之図」より高岡トレース）
- 図 17 『嘉永五年 二上山御見渡所々』所収の前田斉泰登山ルート
- 図 18 守山城跡 向山屋敷周辺地形測量図
- 図 19 守山城跡の位置
- 図 20 本丸での探査範囲と実施状況
- 図 21 観音像周辺の探査結果（平面図）
- 図 22 観音像周辺の代表的な探査断面図

- 付図 東屋周辺の探査結果（平面図）
- 付図 東屋周辺の代表的な探査断面図
- 付図 本丸入口周辺の代表的な探査断面図
- 付図 二の丸の探査範囲と実施状況
- 付図 二の丸の探査結果（平面図）
- 付図 ⑨区の代表的な探査断面図
- 付図 ⑩区の代表的な探査断面図
- 付図 30 29 28 27 26 25 24 23 二の丸の探査結果（平面図）

守山城縄張図（主要部）

第一章 調査の経緯等

第一節 調査に至る経緯

一 守山城跡

守山城は、増山城（砺波市）、松倉城（魚津市）とともに越中の三大山城として広く知られ、富山県を代表とする山城であり、十四世紀半ばの南北朝期から戦国期を経て、十六世紀末の近世初期に至るまで使われた城といわれる。この間は約二五〇年の長きにわたり、改修や整備が繰り返されたとみられる。これほど長期にわたって存続した城は、越中国内でも前記の松倉城・増山城など数か所を数えるにすぎない。

守山城跡については、大正年間より戦前にかけて国の史跡調査の対象となっているが、戦後以降は、行政的な調査は実施されていなかった。その間、地元城郭研究者などにより縄張図が作成されていた。その後、富山県において平成十二年度から十七年度まで「富山県中世城館遺跡総合調査」が実施され、守山城跡の主要部と一部について詳細な測量図と縄張図が作成された。平成十八年度以降から高岡市教育委員会において、守山城跡の範囲を確認することを目的に、広大な「上山塊」を対象として範囲確認調査を実施した。六年間をかけた調査の結果、守山城跡の遺構が「上山塊」の広範囲に分布され、城跡の範囲が広くなることが判明した。また、城郭に伴う遺構以外にも山岳寺院に関係すると思われる遺構も確認されている。以上の成果から、平成二十五年度より詳細調査を開始することとなり、平成二十六年三月には、市史跡に指定された。

二 総合計画における守山城跡

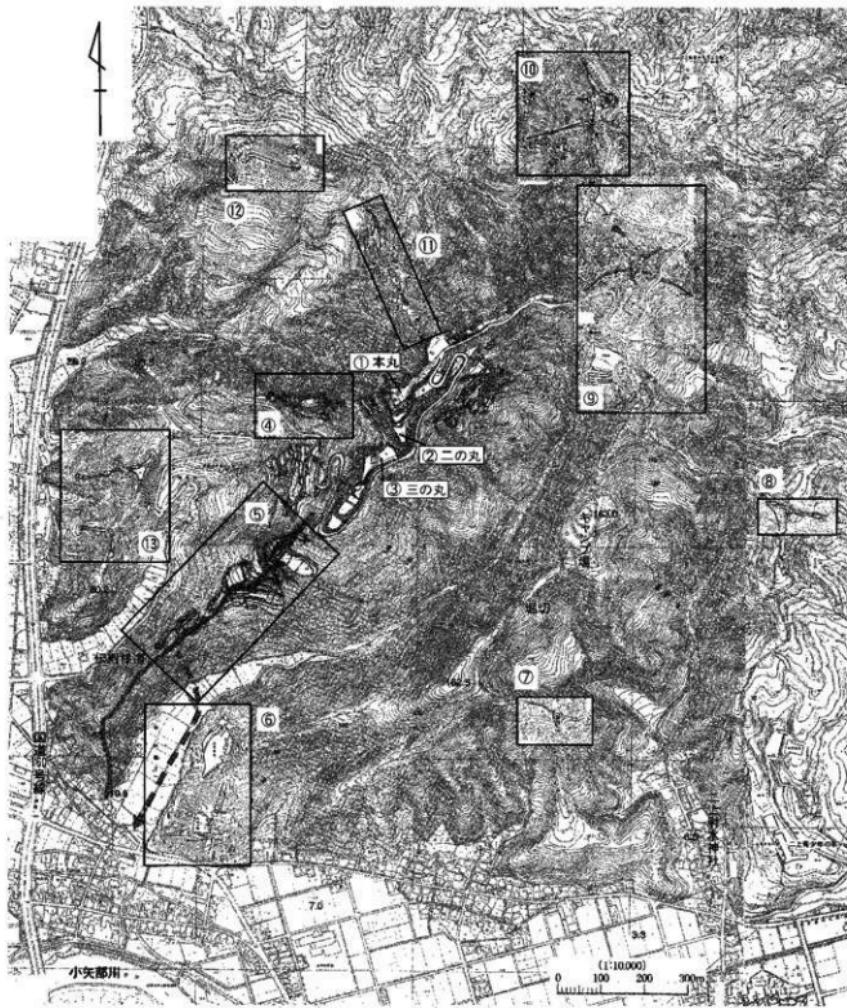
平成十九年（二〇〇七）に福岡町との合併後初となる「高岡市

総合計画」が策定された。この総合計画には、「心豊かな人をはじめぐみ万葉と前田家ゆかりの歴史と文化をたのしむまち」、「ものづくりの技と情熱がつくり出すにぎわいのまち」など、歴史と文化、ものづくりと深く結びついたまちづくりの目標が掲げられており。このように高岡市の目指すべき将来像を掲げ、行政をはじめ様々な主体が参画・活動するためのまちづくりの基本方針を明らかにしている。その中で文化財は、心にうるおいをもたらす地域文化の振興を推奨するため、高岡に残る文化遺産の価値付けを行うことを予定している。そこで前田利長墓所と高岡城跡、守山城跡、木舟城跡は、歴史的な観点からみても相互に関連する部分が少なからずあることから、前田家関連史跡として捉えている。また、高岡市は、「近世高岡の文化遺産群」の世界文化遺産登録を目指しており、前田家関連史跡は重要な構成資産として学術的な価値を高めていくこととした。

第二節 調査の経過

調査の開始にあたっては、既往の成果を含め今後必要な調査を計画した。まず、基礎的な資料の蓄積を図るために、測量図の編集作業、史料調査、遺構確認調査、地中レーダ探査を先行し、将来的には、基礎資料の蓄積が図れた後、発掘調査を実施することとした。

平成二十五年度は、測量調査、史料調査、遺構確認調査、地中レーダ探査を実施した。測量調査は、範囲確認調査等で確認されており、向山地区を対象にし、等高線を表現するとともに、縄張図の修正を行った。史料調査では、守山城の城主に関する記述などにも焦点をあて、新たな視点を加えた。地中レーダ探査においては本丸や周辺部を対象とした。



- ① 本丸 ② 二の丸 ③ 三の丸 ④ 本丸西尾根 ⑤ 殿様道 ⑥ 向山遺構群 ⑦ 二上山南物見台
 ⑧ 二上山南砦 ⑨ 二上山城・馬場 ⑩ 摩頂山南砦 ⑪ 北尾根遺構群 北出丸（I）・（II）
 ⑫ 北尾根遺構群 物見台 ⑭ 守山城西砦

（作図：高岡市教育委員会・富山県埋蔵文化財センター-2006に加筆）

図1 守山城跡調査位置図

第二章 立地と環境

第一節 守山城跡の地理的環境

一 高岡市の立地

高岡市は、富山県の北西部に位置し、県内第二位となる人口一七万五三六八人（平成二十七年二月末現在）を有する県西部の中心地である。市域は、東西約一四・五km、南北約一九・二kmに及び、面積は二〇九・三八〇km²、富山県全体に占める面積は約五%となる。隣接する自治体は、氷見市、射水市、小矢部市、砺波市の県内の自治体のほか、市北西部の宝達丘陵を境として石川県宝達志水町、津幡町とも接している。

市の地形は山間部のほか、丘陵部や平野部から成り、北部では日本海の富山湾に面する。市内には庄川と小矢部川が流れている。市域を東寄りに流れる庄川はかつて度々氾濫を起こしてきた急流であり、頻繁に河道を変えながら広い扇状地を形成してきた。庄川は、現在市内東部を北流しているが、かつて西にあつた流れが時代とともに東に移動してきたという、いわゆる「庄川の当東遷」説がある。もつとも古い主流と考えられるのは野尻川で、中村川、新又川と移り、天正十三年（一五八五）の大洪水で千保川、中田川（庄川）に移り、寛永七年（一六三〇）の洪水で現在の流れとなつたとみるのが定説化している。一方、西寄りを流れる小矢部川は対照的に水量が豊かなうえ、県内七大河川のうち流れが最も緩やかな川であるため、古代から水運に恵まれ、河口は港として利用されてきた。高岡の平野部は、この二つの河川によつてもたらされた扇状地から形成されており、射水平野、砺波平野の一角を担う水の豊かな穀倉地帯が広がる。古くから北陸有数の穀倉地帯を形成し、舟運や海運の発達を促しうる地勢を有した地域

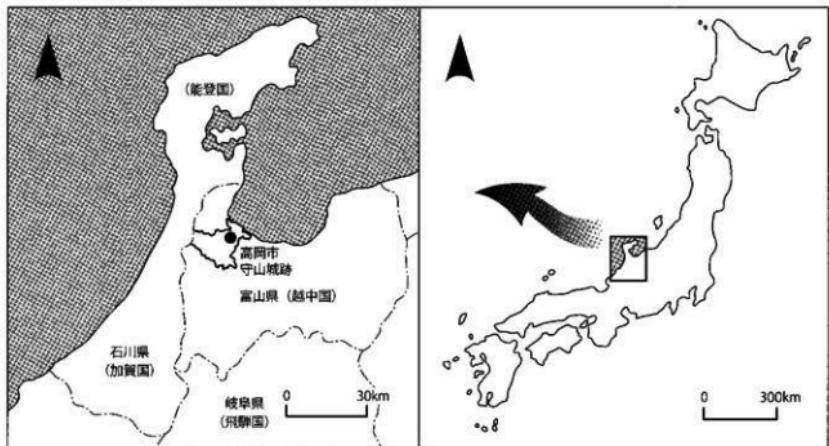


図2 守山城跡の位置

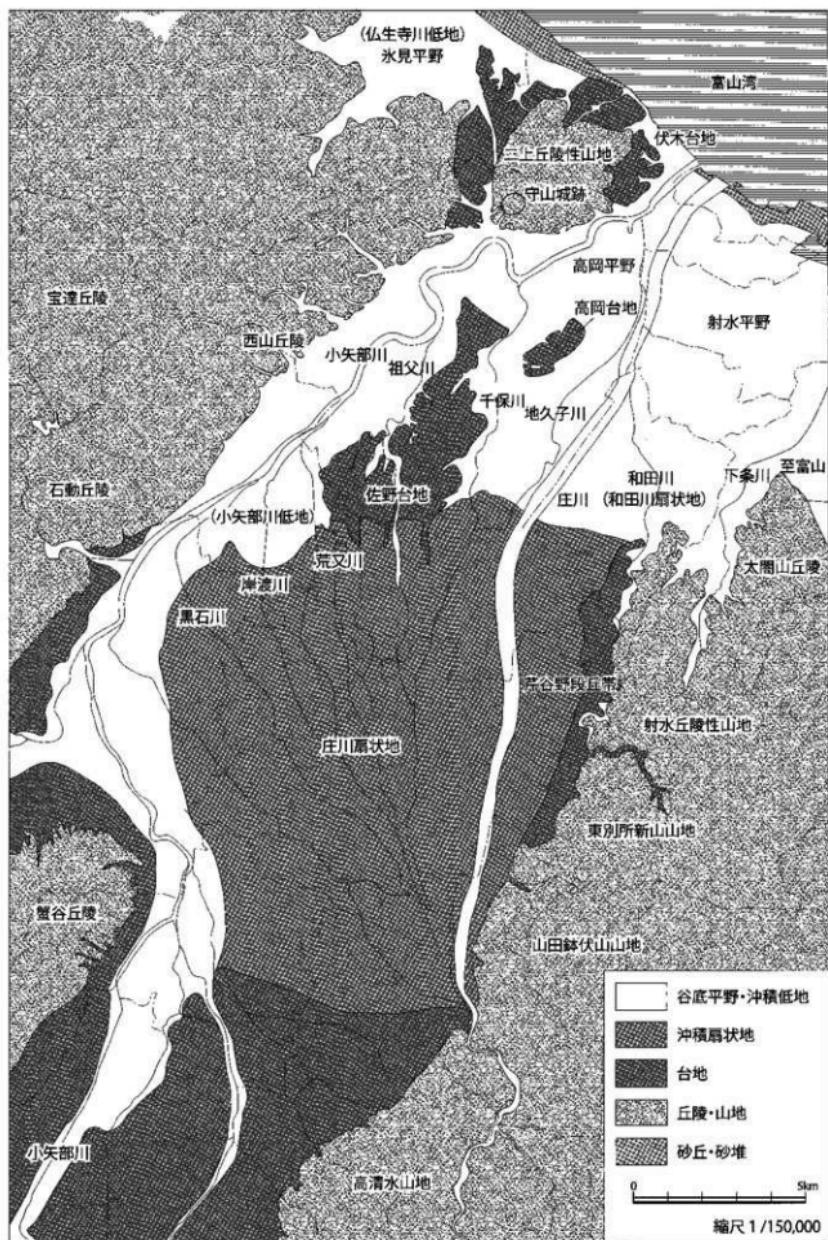


図3 砺波平野周辺地形分類図における守山城跡の位置

といえる。

扇央部では、伏流水が自噴する場所もみられるほどの地下水位の高い湧水地帯を有している。この平野部の中央に位置するのが、標高一〇〇～二〇〇mの高岡台地、佐野台地でそれを囲むように地久子川、千保川、祖父川、荒又川、岸渡川、黒石川といった支流が市内を流れている。また、小矢部川左岸では西山丘陵と呼ばれる標高三〇〇mに満たない丘陵が連なり、能登半島の宝達山を主峰とする石動丘陵・宝達丘陵が繋がっている。

二 守山城跡の立地

守山城跡は、小矢部川左岸にそびえる二上山の西の支峰に立地しており、本丸の標高は約二五八mである。守山城跡が位置する二上山を主峰とする二上山丘陵は、射水平野と氷見平野の間にあり、東西・南北とも約四kmの比較的小さくまとまつた丘陵である。南麓は小矢部川を隔てて射水平野に、北側は田子台地を経て氷見平野に接する。この丘陵は、高度こそ三〇〇mに満たない低山であるが、平野部に突出しているためよく目立ち、古来周辺の人々から親しまれ万葉の歌枕にもなってきた。

守山城は、山上から氷見市内や射水平野一帯を見渡すことができ、能登・加賀国境の動勢、吳羽山丘陵以東の動きを早急に知る位置を占めるばかりか、砺波・射水・氷見の穀倉地帯と、越中平野西半分の経済を左右する小矢部川・庄川の水運、ならびに伏木・放生津の両海港を掌握しているところに特色があつた。その城下町は現在の守護町周辺から海老坂地区にかけて営まれ、今も材木町・紺屋町・鉄砲町・柳町・屋敷町などの地名が残つてゐる。

守山城跡周辺の表層地質は、図4のとおりである。二上山と周縁部は新生代後半の地質からなり地質時代としては比較的新し

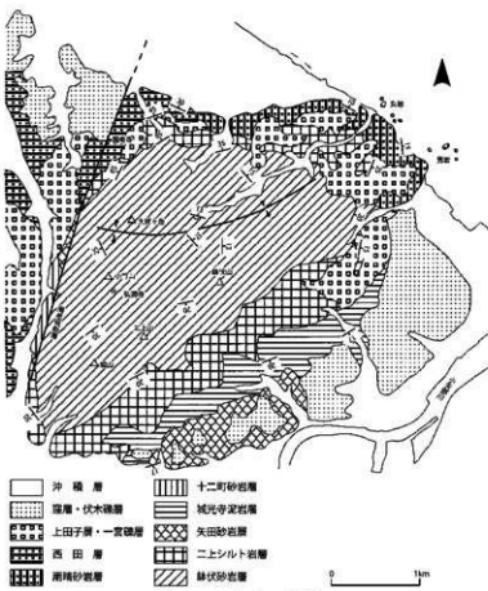


図4 二上山の地質

い時代のもので構成されている。二上山の主体部の地質は新第三紀音川期（約一〇〇〇万年前）の海成砂岩層で鉢伏砂岩層と呼ばれている。岩質は暗緑灰褐色の中粒砂岩であり、所々に少量の海棲貝殻化石を含む。全体的に凝灰質で軽石粒や火山灰を含むのでこの層が堆積した当時、火山活動が盛んであったことをうかがわせる。

表1 二上山地域の層序の地質

地質時代	地層名	備考
完新世	沖積層	低位段丘
	草履・伏木礁層	中位段丘
	上田子層・一宮礁層	高位段丘
	西田層	
更新世	十二町層・南浦砂岩層	
	城光寺泥岩層	
	矢張動岩層	
鮮新世	欠田砂岩層	
	二上シルト岩層	
中新世	鉢伏砂岩層	二上山中心部

出典：松島洋「二上山の地形と地質」『越中二上山と国泰寺』より転載

第二節 守山城跡の歴史的環境

二上山周辺の遺跡については、昭和六十三年の『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報V』にまとめられている。縄文時代の遺物については、城光寺周辺から採集されているが、土砂採掘や各種施設の建設等から旧地形が破壊されている。弥生時代の遺物もほぼ確認されていない。その後、古墳時代になると、二上山の尾根上に古墳が築造されるようになる。それから古代、中世、近世と人の痕跡が継続して確認されるようになる。守山城跡を中心とする周辺の遺跡について古墳時代から時代順にみていく。

二上山周辺は、多くの古墳群が分布していることで有名である。これらの成果は、『昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報』中に掲載されている西井龍儀の「二上山周辺の古墳」にまとめられていて。いずれも丘陵や台地上に立地しており、伏木地区の南半部（二上山南側）も含めて、西は東海老坂ダイラ古墳群から、東は古布古墳群まで、二の古墳群が判明している。それらに加え、二上山の麓に近いところでは、二上横穴墓群や院内東横穴墓が確認されている。古墳と横穴墓の立地が近いことが特徴的である。古墳時代の集落跡を検出していないが、在地の有力者の墓として築造されたと考えられる。

二上山の麓の平地にある上二上遺跡や山園町遺跡、守護町遺跡は、古代や中世の遺物が採集されており、特定の集落跡などは検出されていない。しかし、二上射水神社の御神体として保管されている木造男神坐像が、平安時代後期の作であることから、古代より二上射水神社を中心とする勢力圏が形成されていたと考えられる。

また、二上山の一部には、山岳信仰の痕跡ではないかと考えられる平坦面や経塚が残っていることから、山岳信仰遺跡としての

位置付けも考えられる。中世から近世にかけては、守山城の歴史が主体となるが、二上山全体が長い歴史を持つていることがわかる。守山城の歴史については、「概報I」の「文献史料から見た守山城の歴史について」にまとめられており、今回は、その成果を用いて記載する。附編の年表も参照いただきたい。

南北朝期 守山城が初めて史料に登場するのは、觀応三年（一二五二）である。能登の吉見勢が幕府に敵対する桃井直信らの拠点「師子頭」などを攻めたことが示されている。この「師子頭」は守山の古名とも言われている。その後桃井氏の没落によって守護斯波義将による支配が行われた頃、守山は「森山」と史料に記されている。義将の守護職在任は康暦元年（一二七九）頃までであり、翌年畠山基国が代って守護職に就任している。

神保慶宗期 畠山氏は基國以降、代々越中の守護を務めたが在京していたため、現地の統治には守護代があつた。当初、守護代には遊佐氏が就任していたが、のちに神保氏・椎名氏が台頭した。神保氏は初め、日本海側有数の港町である放生津に居城を構えていたが、永正十六年（一五一九）、越前守慶宗の代に至り、越後の長尾為景らの攻撃を受け、「二上城」にたて籠っている。ここで城名が「師子頭」から「二上城」に変わっている。翌永正十七年、再度、慶宗討伐のため、長尾勢が越中へ進攻し、新庄に陣を布いた。これに対し、神保慶宗は神通川を越えて攻めかかつたものの、十二月二十一日の合戦に敗れ、二上城方面への途中で自害している。

神保長職期 放生津神保氏の滅亡後の神保氏の再興の動きは、享禄四年（一五三一）頃より認められ、その役割を担つて登場した長職は天文十二年（一五四三）頃、富山に築城し、広い地域に勢力を築くに至った。天文二十三年（一五五四）当時、神保職広



図5 周辺の遺跡位置図

(1/25,000)

1. 宇山城跡
2. 二上山頂遺跡
3. 真若毛毛代イラ古墳群
4. 二上山西遺跡
5. 西海老毛道跡
6. 西海老毛小田谷古墳群
7. 濱田不動古墳跡
8. 東海老毛古墳跡
9. 五十嵐古墳跡
10. 五十嵐道室跡
11. 清田本山跡
12. 西清田古墳群
13. 五十嵐御神社古墳群
14. 五十嵐古墳跡
15. 新屋谷内A古墳群
16. 東海老毛みづい山古墳群
17. 二上古墳群
18. 二上經跡
19. 上二ノ道跡
20. 二上石六墓群
21. 巻古墳群
22. 上二ノ更道跡
23. 二上谷内道跡
24. 鳥居古墳群
25. 山野町通跡
26. 防内古墳群
27. 山野町御穴古墳群
28. 防内御穴古墳群
29. 城北古墳群
30. 鹤崎今平子塚跡
31. 城光寺道跡
32. 城光寺上野道跡
33. 大餅ヶ岳道跡
34. 宝珠北道跡
35. 波瀬南道跡
36. 波瀬東道跡
37. 波瀬南道跡
38. 波瀬東道跡
39. 守屋町道跡
40. 向野道跡
41. 内野町道跡
42. 江底古道跡
43. 江底古道跡
44. 江底古道跡
45. 江底古道跡
46. 古文深道跡
47. 入定安道跡
48. 中川道跡
49. 小竹道跡
50. 高岡城跡
51. 大手口道跡
52. 小竹道跡 (永吉店)

が守山城の城主であったことが知られる。そして「守山城」なる城名が見られるのも、この時からである。その後、永禄三年（一五五九）三月、神保長職を攻めるため、長尾影虎（のちの上杉謙信）が越中へ出兵し、富山城、増山城を次々に攻略し、長職を駆逐した。この時、上杉勢の進攻によつて守山城が「自落」したことが史料から伺える。「自落」は、おそらく富山城・増山城での敗北により守山城を守つていた神保職広などがいち早く城を捨て、逃走したことを物語る。いつたんは逃げのびた長職は越後勢の帰陣とともに失地を回復し、新川郡の椎名氏を圧迫したこのため、永禄五年（一五六二）十月、謙信は再び越中へ出兵した。窮地に追い込まれた長職は、謙信に降っている。

神保氏張期
長職は元亀三年（一五七二）初めに没するまで上杉方に属することになるが、守山城へは、神保氏張が入城した。氏張は能登方の意向を越中神保方に指示する役割を担つて、守山城に置かれたとみられる。しかし、永禄十一年（一五六八）、神保家中で対立が生じ、氏張は反上杉方に走つた。その後、神保長職や上杉謙信の標的になり、攻撃を受けたにもかかわらず、守山城は、氏張によって引き続き維持されたが、天正四年（一五七六）の時点では氏張は、謙信に服属する道を選んだと考えられる。しかし、謙信が同六年三月に急死し、織田信長が動き出したことから、氏張は早くも織田方の長孝恩寺（のちの連龍）を守山城に迎え入れている。次に織田の部将、佐々成政が越中へ分封されると、成政の片腕として各地を転戦する。
『末森記』によると、対前田戦に際し、守山城は氏張父子が四千余の兵を率いて守つた



三の丸下にある水輪

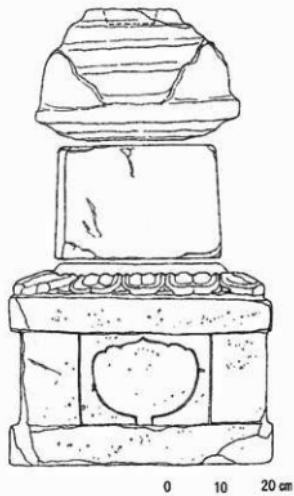


図6 城山出土の宝篋印塔実測図
(西井龍儀氏作図)

という。この守山城は成政方の有力支城の一つとして位置づけられている。

前田利長期

天正十三年八月の成政降伏により新川郡を除く三郡が前田利長に与えられた。これにより、利長が神保氏の去つた守山城に入り、同城を居城とした。天正十八年（一五九三）、秀吉は小田原城の後北条氏を討つため、関東へ進攻し、前田氏もこれに参陣する。慶長二年（一五九七）十月、利長は居城を富山城に移転する。利長の移転後は、前田長種がしばらく留まり、城を守つたのち、城は慶長三年七月以前に廃城となり、その長い歴史を閉じている。

史料の他には、二上郷土資料館に所蔵してあつた城山出土といわれる宝篋印塔や、三の丸の下あたりにある五輪塔の水輪がある。宝篋印塔は、氷見市灘浦海岸から産出される蕊田石で作られており、摩耗が激しく相輪も不明である。しかし、基礎の彫刻はきれいで残つており、南北朝時代、遅くとも十五世紀初めまでには作られたものと推定されている。

（田上和彦）

第一節 守山城主神保氏子孫の行方

一はじめに
守山城主神保氏の最後の当主が神保安芸守氏張であることは、すでによく知られているところである。氏張は佐々成政に従ったあと、関東に赴き、家康に仕えて旗本となつた。この神保氏張系とは別に、異なる道を歩んだ子孫がいる。ここでは、その内の管見に触れた一流について若干の紹介を試みたい。

二 会津藩神保氏の系統

氏張の血を引きながら、越後へ移り上杉家に仕え、糺余曲折を経て奥羽に留まつた一流がある。それは氏張の子で、保科家に仕えた神保長利である。『睡者の独見』（『続会津資料叢書』上所収）には、次のように記載されている。

神保長利

初め左衛門、後隱岐と改む。父は越中の住人神保氏春、母は佐々内蔵介成政の女にて、左衛門儀初め上杉家に被召仕数度の武功有之、中にも上州小幡谷津にて致高名於三ツ山表平豊後守を討取り、天正十八年六月二十三日武州八王子落城の第二十四歳にて二ノ丸へ一番乗致し、其上高名致候を以て則日景勝より感状賜候。

其の後上杉家会津在城の節慶長五年九月家臣直江山城守兼統惣大将として羽州最上家と及合戦、長谷堂城を一時攻に致し、会津へ引払候節、最上家は伊達家の跡加勢両勢一同に其退口を追慕ひ候に付、上杉家の者共甚及難儀候處、隱岐儀

百計りの人数を以て七寸五分監物、反町大膳、夏目軍八等と侍大將五百川縫殿之助を助け、弓鉄砲にて數々相戦中にも目立功名致し、形の如く武功場数の者に候處、上杉家米沢へ所替の節致浪人、其後故有て最上家へ罷出、又鳥居右京様に被召出御知行二千石被下物頭相勤候。

此頃鳥居家にて江戸御城御普請被成候に付、隱岐守普請場の警固として相詰罷在候處、台徳院様普請場御廻りに付隱岐守儀小屋の傍に罷在候を御覽被遊御尋に付、右京様拙者物頭誰と御披露被成候へば、越中の安芸が子候半よく似候との上意有之、追て侍大將被仰付候處、寛永十三年鳥居家御滅知にて再度浪人致候を同年九月朔日、（鳥居右京）土津様へ旧録二千石にて被召仕初は御鉄砲頭被仰付、夫より組頭に被補、同二十年御入部の節御加増三百石被下候。

隱岐儀若干の頃より愛宕神社を鎮護神に崇め山形に罷在候節は自己知行所村山郡村木沢へ勧請し、会津へ罷越候では正保二年頃の上天寧村山ノ内に小祠を建立、主神像を安置致し日夜致尊信候。

右体武功の者に候故折々土津様御前へ被召出戦場の様子御尋被遊候儀も有之候處、或時例の通り被召出御咄の序戦場の手柄ども御称美被成、鎧合の節一番に進み候心懸御尋有之依て御答申上候は鎧合に罷成候ては並々の者は本心無之何れへ向ひ候ても人目不相分様に候間、兼々信心致候愛宕神社を只管祈念致し南無愛宕と申声の内より鎧を打込候ばかりに

外に心懸とては無之候へども、毎度神明の冥助を以て人並に働き候由申上候へば殊の外御感嘆被遊候儀有之右に記し候

通り勇名格別の者故、御取扱も他人に勝れ、嫡子内蔵介利重に新知三百石被下隠岐組に被附置候處隠岐儀老年に相成江戸勤番御免被成、内蔵介に代番被仰付養生致候へ共、老病漸々差重候を以て生涯の御礼書付に認め、重々御厚恩難有奉存候最一度御用にと存候へ共相果候事無念千万に候、倅御恩報申様にと念願に候。乍恐御前へ被仰出被下度旨保科民部方へ差出し、慶安二年正月七日行年八十三歳にて致病死候。

依つて城下大竜寺へ葬り、法名乾陽院殿大宗良清と相唱候。三月二日に至り、遺跡二千三百石の内、嫡子内蔵介へ千五百石被下組頭被仰付、二男惣左衛門に五百石、三男平八郎に三百石分知被下候。

これには母を佐々成政娘とするが、『寛政重修諸家譜』では織田信秀の娘としており、相違がみられる。上杉家の武功は主に景勝時代だったようであり、特に慶長五年上杉軍による最上領長谷堂城攻めの際は、追撃する最上・伊達勢を防いで功名を上げている。なお、その際に働いたとする七寸五分監物は、元越中の武将で父肥後守と共に謙信の能登攻めに従軍し、天正七年（一五七九）敗れて越後へ逃れた轄田監物にあたるとみられる。ここにも越後へ移って、上杉家に仕えた者がいる。

ところで、この長利が上杉家に仕えていたことを示す記載が

『文禄三年（一五九四）定納員數目録』に見出せる。そこには「越中勝山在番衆直江抱」として、

六人

一百一石三斗八升
右ハ安芸守子、後与板鳥越村ニ被差置、

新保五郎左衛門

とある。この内、「新保」は「神保」の誤記とみられる。そのことは五郎左衛門を「安芸守子」とすることにより裏付けられる。

当時の長利は五郎左衛門と名乗っていたのである。勝山城は越後西端の山城で、越中から退いた国衆らを守備に就かせていた。彼らは直江兼続の配下となつて、越中との国境を固める役目を果たしていたが、この史料によれば、長利は後に直江氏の本拠、与板の鳥越村に配置されたことがわかる。

ところが、慶長三年（一五九八）上杉氏は会津移封となり、越後を離れることになった。直江兼続は米沢城に入り、麾下の与板衆などを率いた。同五年の『直江支配長井郡分限帳』によると、「与板衆」の中に知行高二百石として「神保五郎左衛門」の名が見られる。同様に越中出身者である唐

人、塩井の名も見出せる。しかし、同年の関ヶ原の戦い後、上杉家は所領を大幅に削減され、景勝は米

沢へ移封となる。

長利はここで浪人となるが、山形最上家、さらに同家改易後は鳥居忠政に仕え、知行二千石で物頭を務めたとある。この鳥居家時代、秀忠巡視の際、藩主鳥居氏が物頭である長利を披露したところ、秀



越中勝山城

※高岡徹撮影

長利はここで浪人となるが、山形最上家、さらに同家改易後は鳥居忠政に仕え、知行二千石で物頭

忠は越中出身の旗本神保安芸守の子であり、半ばよく似ていると述べたという。氏張は秀忠にも知られていたと見える。後に侍大將となるが、寛永十三年（一六三六）、鳥居家も所領削減となつたため、再び浪人となるが、同年新たに山形に入った保科正之に鳥居家時代と同じ二千石で召抱えられ、その後の会津入部の際、さらに三百石の増加を受けている。おそらく上杉家時代の武功が認められたのであろう。

江戸時代の初期には、藩主が生々しい戦場の様子を実際に体験した家臣から聞くことがよくあつたが、保科正之も長利をたびたび呼んで話を聞いている。その中には、鎧を持つて真っ先に敵陣へ切り込む際の心構えを尋ねることもあつた。これに対し、長利は普段から信仰している愛宕神をひたすら祈念し、無心に南無愛宕と唱えながら鎧を打ち込んだだけで、いつも神明の助けで人並に働いただけと答え、正之から大変褒められている。長寿を保つたことから、藩内でも貴重な存在だったと思われる。慶安二年（一六四九）八十三歳で没したという。以後、子孫は代々会津藩士として存続する。幕末の家老内蔵助、その子修理（共に自害）の活躍はよく知られているところである。

三 おわりに

守山城主神保安芸守氏張は、戦国末の越中を代表する武将の人である。だが、これまで『寛政重修諸家譜』に記載された旗本以外の傍流については、触れられたことがない。今回、氏張とは対照的に反織田の道を歩んだ子の存在と流転の跡を越後や奥羽の地に追うことができた。十分な裏付けを得ているとは言い難いものの、今回の成果によつて守山城主神保氏の実像の一端をこれまで以上に明らかにできたとするなら、幸いである。

第二節 描かれた守山城跡

守山城跡を描いた古図としては、今のところ、『守山城跡範囲確認調査概報』（高岡市教育委員会、平成十九年刊）で紹介した「二上山城跡へ御登山道筋の図」（嘉永五年）が知られるにすぎない。その後の文献史料調査の過程で、安政三年（一八五六）刊行の俳句集『俳諧多磨比路飛（たまひろい）』（麦仙城鳥岬編）に二上山一帯を描いた絵が見出された。

絵は越中国内の名所を描いた中の一点だが、中央の城山が多数の削平段によって刻まれている様子が、見事に描かれている。とりわけ、山頂部の本丸は明瞭な平坦面を見せ、そこから下つた山腹にも削平によって造成された多くの平坦面（郭跡）が存在したことが一目瞭然である。このように上下に削平段を連ねる形で城郭を構成している点に、守山城の繩張の特徴が如実に示されている。

この内、山頂部について仔細に見ると、左手が二段に描かれ、最上段の本丸とその直下にある腰郭の段を描き分けていることがわかる。部分的だが、特徴をよくつかんでいる点に注目したい。

守山城跡は廢城後、加賀藩の藩有林（御林）に指定されていたが、幕末期にはまだ樹木が繁茂せず、こうした削平段を遠望できる状態だったことがわかる。なお、絵は二上山南麓、小矢部川右岸の木町付近から見た情景を描いたとみられるが、左右の幅を圧縮し、山の高さを強調した描き方となつていて。

左端に遠く見える山は石動に近い稲葉山で、中央に城山と二上山が並び、右端の遠景に鉢伏山らしき山を入れていて。中でも二上山の山頂は象徴的に高くそびえて描かれている。注目されるのは、城山から左下に下つた麓近くに、山上を削つて平らにした削平面が見られることがある。ここは重臣の居住した向山屋敷（範

『閉確認調査概報III』(平成二十四年刊、参照)にあたる。とすれば、その左に描く山は内輪子谷を挟んで、本丸から殿様道を下つた尾根の先端部であろう。

また、城山直下の山はその位置から、二上経塚のある山で、その右は嘉永五年前田斎泰が二上山に登る途中、休息した仮御腰掛

所(『範囲確認調査概報II』平成二十一年刊、参照)の山、さらにその右下には射水神社のある森を描くようである。

近世の俳句集ではあるが、このように注意して見れば、当時の城跡に関する貴重な情報を我々にもたらしてくれる点で見逃せない。



図7『俳諧 多磨比路飛』(富山県立図書館所蔵)に描かれた守山城跡の遠景
手前は小矢部川

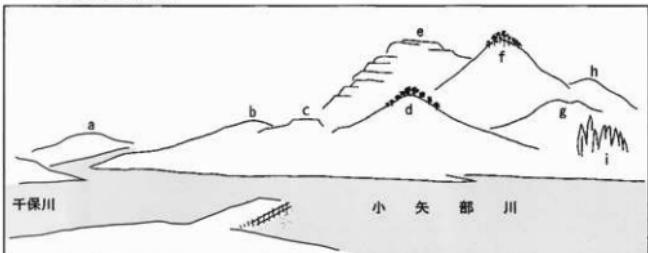


図8『多磨比路飛』に描く二上山一帯

- | | | |
|-----------------|-----------|--------|
| a 稲葉山 | b 大手道のある山 | c 向山屋敷 |
| d 二上経塚のある山 | e 守山城本丸 | f 二上山 |
| g 二上山南端(仮御腰掛所跡) | h 鉢伏山 | i 射水神社 |

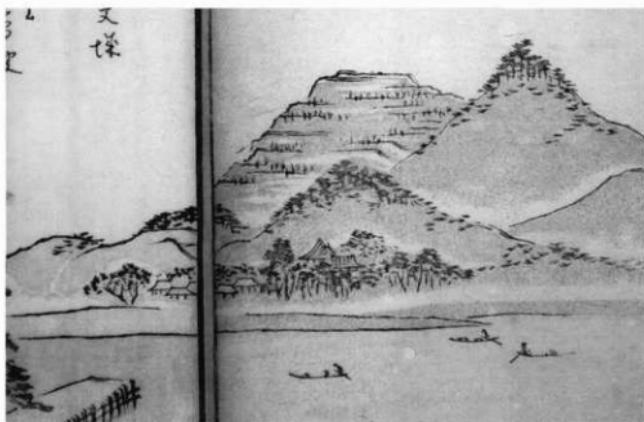


図9 守山城跡付近を拡大したもの (多数の削平段に注目)



図10 『多磨比路飛』に描かれた各地点 (b~i は図8と同じ)



小矢部川右岸の現高岡市木町より守山城跡一帯を望む (平成26年11月撮影)
『多磨比路飛』の絵はここから見た景色を描くが、実際はずっと南に引いた所
からの遠景をうまく収めている

第三節 神保氏張の治水伝承

一 はじめに

ここに紹介する史料は、守山城主神保氏張による治水伝承の史料である。当史料は近年行ってきた、守山城に関する文献史料調査の一環で初めて見出したものである。戦国末の天正四年（一五七六）、当時の庄川・和田川下流一帯が大水になり水に浸ったため、神保氏張の命により新たな川筋を掘って被害の拡大を防いだといふものである。

このことは一次史料で確認できないものの、地元の十村関係文書や加賀藩の記録にも伝承として收められており、ある程度信頼できる内容を含むと思われる。越中においては、戦国期はもとより、中世全般にわたって、國衆レベルでの治水に關わる史料は知られておらず、注目すべき内容であると言える。

二 史料の紹介

まず、地元の十村関係史料である塙本家文書の『射水郡分記録等抜書』の該当箇所を掲げる。

A 一、先年正川之水、小矢部・千保・荒俣此三川流落申所二、

天正四年用水筋占入川仕、正川・和田川□□ニ罷成、俄ニ

大水ニ成候處、能町村占東筋十三ヶ村□附ニ成候由、守山

神保安藝守様御家人荒木新左衛門殿しやうぎニ御腰懸、御

館様もまいり、七日七夜昼夜三不限川堀仕、人足共も寝不

申由承傳候、其故能町村橋の近所新川と申候

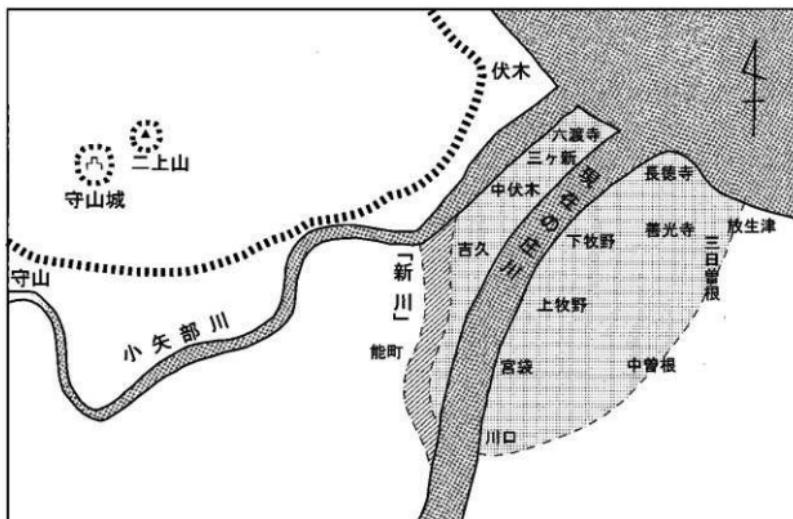


図 11 天正 4 年水害時の神保氏張による新流路開削概念図 (■水害推定地域)

「これとほぼ同内容だが、一部相違点のある加賀藩の『御郡方有増覚書』が別に存在する。参考までに煩を厭わず、その該当箇所を掲げる。

- B
一、先年庄川ノ水、小矢部・荒俣・千保川三筋被流落申候處
二、天正四年ニ用水筋古入川仕、庄川・和田川是一所ニ罷成、俄ニ大水成候ニ付、能町村古東筋拾三ヶ村水付に罷成
候ニ付、守山神保様御家中荒木新左衛門殿川筋江御出、
セウキニ腰を掛、昼夜食物も其所居なから喰、寝不申七日
七夜川筋堀落被申候、其故能町近所新川と申候

天正四年と言えば、上杉謙信が越中をほぼ制圧した年であり、守山城の神保氏張もその旗下に入っている。A・B両史料を総合すると、この年、雨量が多くたせいであろうか、河川の増水により能町村から東方の十三か村がたちまち水浸しになつたといふ。その範囲はおそらく現在の上牧野・下牧野・吉久・中伏木・六渡寺などの一帯であろう。水害の様子は守山城のある山上からも一望できたはずである。

このため、氏張は家臣の荒木新左衛門を現地に派遣し、急きよ新たに川筋を掘つて流路を変え、同地域の被害を解消するよう命じたのである。その川筋は明治期まで現在の石瀬から北流し、小矢部川に合流していた、庄川下流の旧河道にあたるとみられる。無論、突貫工事とは言え、何もなかつた所にいきなり川筋を掘ることとは困難であり、過去に分流が流れた跡などを利用したとも思われる。



図12 神保氏張の治水伝承を記載する『御郡方有増覚書』とその該当箇所（中央）
金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵

A・B両史料共、この時、現地で人足を指揮した荒木新左衛門が七日七夜、床几に腰を掛けたまま、昼夜兼行で工事を進めたとし、Bでは食事もその場で取ったと伝える。またAによれば、人足達も寝ずに働いたという。そのうえ、「御館様」すなわち城主氏張自身もその場に来たという。激励のための陣頭指揮だったのであろう。この結果、新たな流路が能町付近を流れたことから、そこを「新川」と呼んだという。

三 おわりに

以上、二点の史料を見てきたが、天正四年という戦国末の時期に行われた、川水の氾濫対策としての新流路開削工事を伝えるものとして貴重である。戦国期の史料は、戦(いくさ)に関するものに偏りがちだが、このように支配下にある地域で治水工事を行う領主の姿は、これまでほとんど見出せず、注目される。おそらく地元で語り伝えられた内容が、後に十村や加賀藩の史料に書き留められたものと思われるが、守山城主の氏張が「御館様」と地元民から呼ばれていたことも新たな知見であり、氏張の領主像を知る上で興味深いものがある。

第四節 旗本神保氏の墓所について

一 旗本となつた神保氏

守山城主神保氏張は、佐々成政に従い肥後に赴いたものの、成政の切腹(天正十六年)により浪人となつた。その後については『寛政重修諸家譜』に次のように記す。

これとは別に『寛永諸家系図伝』で同じ箇所を見ると、次のように記す。

同十七年、浜松にてめし出され大権現につかへたてまつり、下總国にをひて二千石の地をたまふ。

奥州・関原両陣の時、鉤命をうけたまへりて江戸御留主居番をつとむ。

文禄元年八月五日、江戸にをひて死す。とし六十五。法名玄的居士。

両書の記事の内容を総合すると、天正十七年(一五八九)に浜松で徳川家康に仕え、旗本となつて文禄元年(一五九二)二月、下總国香取郡で二千石の知行を得ていることがわかる。下總における神保氏張の知行所の内訳については、次の史料がある(A～Hは図13中の位置を示す)。

御知行書立

下総國やはき領之内

ひの木之内(A)

同領

一、六拾六石四斗毫升三勺二才

一、百四拾五石四斗三合八勺四才

一、武百七拾六石三斗九升三合

一、百六拾參石武斗四升毫合六勺七才

一、武百參石毫斗七升一勺七才

一、三百八拾六石七斗七升九合八勺□才

一、参百拾武石五升

一、四百四拾六石五斗四升六勺七才

合 武千石

同領

同領

同領

同領

同領

同領

同領

右分御請取可被成候、□□御朱印可被申請候、
(第三回)

卯七月吉日

伊 奈 熊 藏(花押)
長谷河七左衛門(花押)

(第二回)

神保 安芸守殿(花押)

(第三回)

知行所となつた八つの郷村は、桧木の内・金山郷の内・高津原



図 13 神保氏張の下総国内知行所分布図

郷・中野郷・稲荷山・成井郷・柴田郷・古山郷であり、それらの所在地は図13のとおりである。いずれも成田の郊外にあたるが、金山だけは成田に近接する位置にある。他の七か村の内、中野・稲荷山・成井・柴田・古山が一つの近接する知行村グループを、また桧木・高津原が別の近接知行村グループを形成する⁽²⁾。氏張が葬られた宝応寺（後述）は、この内の稲荷山から直線距離で約八〇〇m、中野から約一・五kmを隔てる位置にある。

前述のように旗本神保氏は当初二千石の知行所を与えられたが、寛永二年（一六二五）三代氏勝が二代氏長の遺跡を相続する際、五百石の地を弟氏房に分知し、知行高は千五百石となつた⁽³⁾。なお氏張時代の事績として、秀吉の奥州出陣や関ヶ原の戦い、また文禄元年の肥前名護屋出陣にあたつては江戸での留守居役を務めたといふ。同年八月五日、江戸で没し（六十五歳）、香取郡伊能村の宝応寺に葬られている。



旗本神保家墓所のある宝応寺（現千葉県成田市）



神保家墓所。手前の初代氏張墓から本堂方向に計5基が並ぶ



同上。本堂側から見る

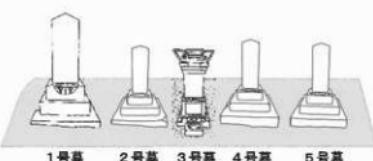


図14 神保家墓所立体図

二 神保氏墓所の概要

これまで氏張の墓については、本県で取り上げられたことがないため、今回の守山城跡詳細調査にあたり、戦国期の城主関係地として墓所の実態調査を行うこととした。

神保氏の墓所が存在するのは、『寛政重修諸家譜』に記すように旧下総国香取郡伊能村（現在の千葉県成田市伊能）の曹洞宗宝応寺である。成田市の中心部からバスで四〇～五〇分の郊外に位置する。沿線は主に畑作地帯だが、工業団地もいくつか立地する。以前は大栄町に属したが、合併により現在は成田市に含まれる。

神保氏の墓は同寺の墓地の一角を占める。中世、当地の豪族であつた大須賀氏の墓塔群に隣接する形で、約六mの間に五基の墓が一列に並んでいる。便宜上、奥から順に一号、二号、三号と呼ぶなら、宝篋印塔である三号墓を除き、他はみな方形の台石に舟形の墓碑を立てたものである。石材は五基とも安山岩とみられる。

三号墓の宝篋印塔は形状的に異質だが、現況は最上部の相輪が失われている。

五基の内、最大のものは氏張の一號墓であり、三段の台石の上に幅四五・五cm、奥行二五cm、高さ一二五・五cmの舟形墓碑が立つ。最下段の台石の幅は一〇六cm、地上高は全体で一八四cmを測り、他の四基とは歴然とした違いがあり、いかにも旗本神保氏の初代にふさわしい、風格を感じさせる。



氏張墓の墓碑正面



正面から見た氏張墓（1号墓）

法名などの碑文は三号墓を除き、すべてに見られるが、氏張墓のみは表裏とも碑文を刻み、しかも表に家紋を刻むなど、明らかに他の墓とは別格である。では、氏張墓の碑文等を掲げる。



氏張墓碑の裏面 「越中守山之城主」の刻銘がある

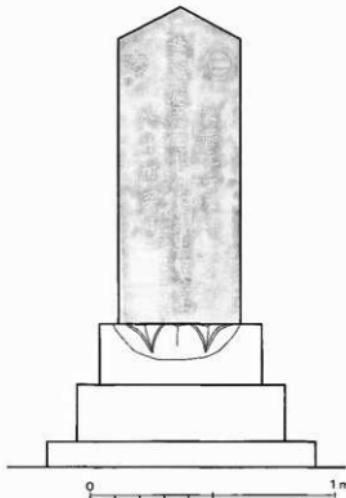


図15 氏張墓の墓碑

(表面)

文禄元壬辰年

華嚴院殿從五位下前芸州太守端山玄的大居士

八月初五日

一

碑面の上部には左に「薦の葉」、右に「丸に二引両」の家紋を刻む。家紋については、『寛政重修諸家譜』の記載どおりである。

(裏面)

「桓武天皇十四代之後胤

二宮太郎朝忠九代之孫

越中守山之城主從五位下

神保安芸守平
口張

これによると、氏張は桓武天皇を始祖とする平氏の流れを汲み、仇討で有名な曾我兄弟の実姉の夫二宮太郎朝忠より九代目であるという。それはさておき、関東に下つても「越中守山之城主」と墓碑に刻んでいる点は、初代が越中時代に守山城の主であったことを誇りにしていたことがうかがえる。そこには遠く関東に下つた神保氏の越中への思いが込められているかのようである。

続いて、他の墓について述べる。まず二号墓は三段の台石の上に高さ九一・五cmの舟形墓碑を立て、地上高は一三一・五cm。碑文には「慶徳院殿宣室閑大姉」とあり、延宝七年(一六七九)五月の没年を刻む。住職のご教示によれば、神保市右衛門の母とのことである。ただし『寛政重修諸家譜』によると、市右衛門は三代氏勝、四代氏信ともに名乗っている。没年を考慮すると、三代氏勝の母があさわしいが、実は四代氏信は氏勝の弟にあたり、兄

の養子となつて跡を継いでおり、母は同じとなつていている。とすれば、二号墓は二代氏勝、四代氏信の母のものとなろう。とはいえ、本人の没年を考慮すると、二代氏良没後もさらに五十年余り生きたことになり、十代で嫁いだとしてもかなりの長寿であったことが推測される。



二代氏長夫人の墓碑（2号墓）

三号墓はすでに述べたとおり唯一の宝篋印塔であり、上部の相輪を欠いた状態で地上高一二六cm。碑文は判読できなかつたものの、過去に晒谷和子氏が行った調査によれば、第二代氏長墓にある。『寛政重修諸家譜』によると、没年は寛永二年(一六二五)四月である。四号墓は三段の台石の上に高さ九一cmの舟形墓碑を立て、地上高は一四一cm。碑文には「月心院殿茂林樹繁居士」とあり、寛永十七年(一六四〇)九月の没年を刻む。第三代の氏勝にあたる。五号墓は同じく三段の台石の上に高さ九二cmの舟形墓碑を立て、地上高は一三六cm。碑文には「月心院殿固岳宗堅大居士」

とあり、没年は刻まない。住職のご教示によれば、第四代の氏信にあたる。『寛政重修諸家譜』によると、没年は元禄十年(一六九七)七月である。



三代氏勝墓の墓碑（4号墓）



二代氏長墓（3号墓）他の墓と違い、宝蓋印塔だが、上部の相輪は失われている



四代氏信墓（5号墓）

三　おわりに
以上、千葉県成田市に所在する旗本神保氏の墓所について簡単な調査報告を行つた。現地での時間的な制約もあり、十分とは言ひ難いが、計測・撮影・拓本採りなど一連の作業を市教委文化財課の田上和彦主事と共に終えることができた。最後に帰路のバスの時間が迫り、二人でバス停まで必死で走ったことも忘れ難い。守山城の歴史を明らかにするためにも、旗本神保氏の調査は今後とも継続していく必要があろう。

註

- ①原史料の所在が不明のため、川村優「旗本神保氏の村落支配について—正徳年間下総知行村の出訴一件を中心にして—」（『信濃三三巻二号、昭和五十六年』）に拠つた。
- ②註①川村氏論稿参照。
- ③『寛政重修諸家譜』。



氏張墓碑の採拓風景

第五節 前田斎泰の二上山登山史料・補遺

嘉永五年(一八五二)の加賀藩主前田斎泰による二上山登山について、すでに『範囲確認調査概報I』で登山の道筋絵図を紹介し、「同概報II」で奥村栄通の日記(官事拙筆)により斎泰らが蘿の慈尊院で小休みを取った様子、さらに途中の山中に設けられた休憩所(仮御腰掛所)の遺構についても紹介した。その後の調査で、この登山に直接関わる史料が一点見出されたので、今回補遺として報告しておきたい。いずれも「二上射水神社文書」(二上射水神社文化財保存会所蔵)の中にある。

史料A (嘉永五年) 前田斎泰の二上山登山につき郡奉行の指図次

第に準備心得方書状

書付を以奉御達由

今般

御廻道三付、二上山城跡江茂可被為遊御登山旨被仰

出候段、大野織人①殿より申談有之旨二而、御道筋手入方等新川

郡江出役之改作御奉行右射水御郡御奉行江申来候由、二上山

峯者能諸方見得申場所ニ付、右頂上等處城跡江被為遊御越

候 御道筋等取直シ方茂申來、右 御登山 御道筋者多分養

老寺拝領山ニ而、何分指懸申儀ニ付、取直御指支無之様御郡

御奉行左御扶持人十村江申談有之、二上山頂上等ニおゐて御

小休之義も右 御登山弥御指支無之趣御郡御奉行左御達有之

候得者、御小休不被為遊而難相成訣ニ候得者、其節可被仰渡

旨等御郡御奉行左仰來候間、不指支様可相心得指懸リ候儀ニ

付、御出迎等御指図難被成御郡御奉行等江直ニ引合、指図次

第二可相心得旨被仰渡奉得其意、先以今般二上山江被為遊

御登山候儀拙寺共ニおゐて難有奉恐悦社頭等掃除仕、二上

山頂上三(後欠)

史料B

嘉永五年三月 前田斎泰帰國の節の射水郡守山小休所を
慈尊院に仰付方願書

今般 御帰國御道中高岡迄二上山城跡江 御立寄被為 遊候
所、射水郡守山御小休所之義、寺社御奉行所乃被仰渡之趣、
御添書を以御申渡奉得其意候、右城跡江數拾丁之道程者都而
山路ニ御座候、依之至而手挾成建物ニ御座候得共、一山之内
慈尊院境内ニ御座之間去春新ニ取しづらへ置申候、奉恐入義ニ
御座候得共、御小休所之義被為仰付被下候ハヽ、難有仕合ニ
可奉存候、何卒右願之通被為仰付被下候様奉願上候、此段寺
社御奉行所江宜敷被仰上被下候様奉願上之候、以上

嘉永五年三月

二上山

慈尊院

同山

本覚坊

明王院

金光院

さて、「史料A」は差出者・宛名・差出年月が後欠のため不明だが、末尾に「今般二上山江被為遊 御登山候儀拙寺共ニおゐて難有奉恐悦社頭等掃除仕、……」とあることから、「史料B」と同様、養老寺を構成する慈尊院など三寺が触頭である明王院金沢卯辰山に宛てたものとみられる。差出年月についても、やはり内容から「史料B」と同じ嘉永五年三月頃とみてよいであろう。

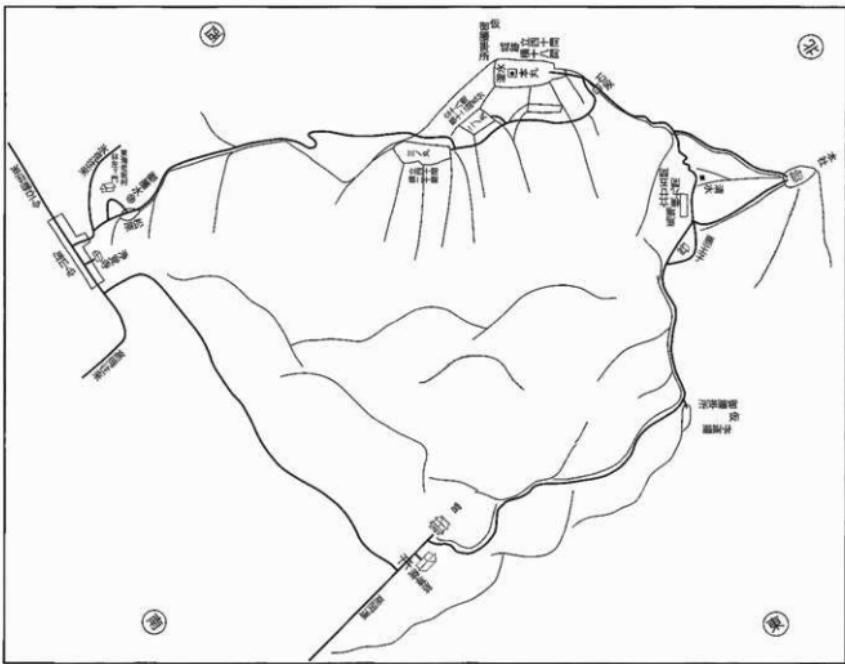


図16 守山城跡古図（富山県立図書館蔵「嘉永五年四月五日二上山城跡江御登山御道筋之図」より高岡トレイス）

内容を要約すると、次のようになる。

- ① 齋泰の二上山（守山）城跡登山の意向は、大野織人によつて伝えられ、斎泰の通る道筋の整備などについては、新川郡へ出張して来た改作奉行から射水郡の郡奉行へ指示がなされている。
 - ② 斎泰が登山の意向を示したのは、二上山の峯が周囲をよく遠望できる場所だったためであり、二上山の頂上から（守山）城跡へ向かう道筋などの修繕方についても指示があつた。
 - ③ 登山の道筋は大方養老寺の拝領山にあたるため、道筋の修繕について支障のないよう、郡奉行より地元の御扶持人十村へ説明が行われた。二上山頂上などにおいて小休みすることについても、支障がない旨の御達しが郡奉行よりなされている。
 - ④ なお、斎泰の小休みの際、斎泰より慈尊院らにお言葉があることを心得ておくよう、郡奉行より通知があつた。ただし、当日は郡奉行がその場で斎泰出迎えの指図をすることは困難のため、事前に直接郡奉行に相談し、心得方を準備しておくよう申し伝えられている。
 - ⑤ 今回、斎泰が二上山へ登山することは養老寺の寺院にとつて有難く恐悦している。社頭を掃除し、山頂に（……してお迎えしたい）。
- これによれば、藩の郡奉行から事前に登山ルートにあたる道筋の整備や修繕についての指示が出され、斎泰の出迎えや小休みの際の準備心得方についても、その指図に従うよう寺側に命じている。
- 次の「史料B」は当日の守山小休み所に関わるものであり、慈尊院ら三寺から触頭の明王院に宛てた願書となつてゐる。具体的な内容は次のとおりである。
- ① 斎泰帰国の途上、高岡から二上山（守山）城跡へ立ち寄られるに

際し、守山小休み所について寺社奉行所より命じられたことは了解した。

②城跡への數十丁の道はすべて山道のため、手狭な建物ではあるが、慈尊院の境内に御座の間を昨年春用意しており、恐れながら小休み所を命じてもらえば有難い。このことを寺社奉行所によろしく申し上げてほしい。

この史料から、寺側が事前に登り口の慈尊院を齊泰の小休み所としてほしい旨、寺社奉行にお願いしてほしいと申し出していたことがわかる。願い上げの結果はすでに『範囲確認調査概報II』の中でも紹介したようだ。齊泰の立ち寄りが実現している。御座の間を新調した慈尊院側にとつては喜ばしいことであつたろう。

(高岡徹)

註

①この時点での役職は不明だが、天保十年（一八二九）から翌年まで金沢町奉行を務めている（『加越能近世史研究必携』）。

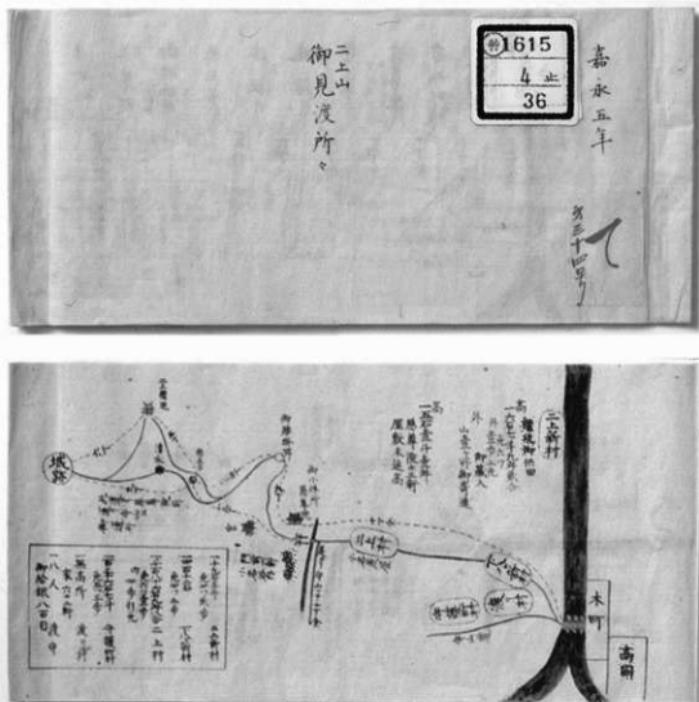


図17 『嘉永五年 二上山御見渡所々』所収の前田齊泰登山ルート
(金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵)。慈尊院の箇所に「御小休所」と記入する

第四章 測量調査

第一節 概要

一 目的と方法

守山城跡の実態解明に必要不可欠なものが詳細な測量図である。平成十六年度から十八年度に実施した詳細測量によって、本丸周辺や殿様道の一部は図面化されていたが、平成十八年度から開始した範囲確認調査によつて、従来考えられていた城郭の範囲よりも広がることが判明し、新たに測量する必要性がでてきた。特に、「概報III」に掲載した内輪子谷の向山周辺の広大な平坦面については、前田対馬守長種の屋敷跡であり、幼少の前田利常が育てられた場所ではないかと考えられている。将来的調査も視野に入れて測量図の作成が必要であると考え、現地測量の計画を行つた。新たな測量図を追加していくため、現況地形測量の編集という形で作業を進めた。

調査の方法は、調査区周辺の都市再生街区基準点を利用するとともに、新たに三級・四級基準点を設置し、トータルステーションを用いて五〇〇分の一の測量図の作成を目指した。最後に、学識経験者と現地を確認し、素図の構成を行い、現地補足を行つた。

二 調査の経過

平成二十五年度の現況地形測量編集業務については、(株)エイ・テックに委託した。調査期間は、平成二十六年二月十二日から三月二十四日までである。

第二節 向山屋敷等について

作成した測量図面を見ながら、各平坦面や堀切の規模を確認したい。なお、各平坦面の名称は、「概報III」で用いたものを引き

繰りながらしていく。平坦面Aは、南北五〇m×東西三七mである。等高線の間隔も広く広大な平坦面であることがわかる。平坦面Aから東南側に一段低く斜面を掘り込み、東西の両脇を掘り残しの土壁で塗した平坦面Bの内部は、南北一〇m×東西二二mである。平坦面Bの西北にある一段高い小平坦面は、南北三m×東西一一mである。等高線の間隔は平坦面Aに比べて狭いが他の斜面と比べると緩やかである。測量図面には、平坦面Bの両側の土壁が明瞭に確認することができる。平坦面Bの南側には平坦面Cがあり、南北九m×東西三〇mの規模である。平坦面Cの南側には、堅堀状の堀り込み(b)が確認される。これらの平坦面の上にあり尾根上を断ち切る堀切は、上幅五mである。堀切の長さは東西二二mである。

以上が、「概報III」で報告した向山屋敷周辺の測量成果であるが、測量調査を行つたところ新たに追加される小平坦面などを確認したので報告したい。まず、平坦面Aの北西側、約五m下に南北三四m×東西二四mの細長い平坦面を確認することができた。次に、平坦面A北端に南北六m×東西三mの小平坦面を確認できた。これらの平坦面が、向山屋敷の縛張にどのような意味を持つか検討が必要であるが、測量図から得られる情報として記録したい。今回、向山屋敷の主要部について図面化することができたが、道の部分や尾根筋を降りていく範囲まで図面化されていないので、今後の課題としたい。

(田上和彦)

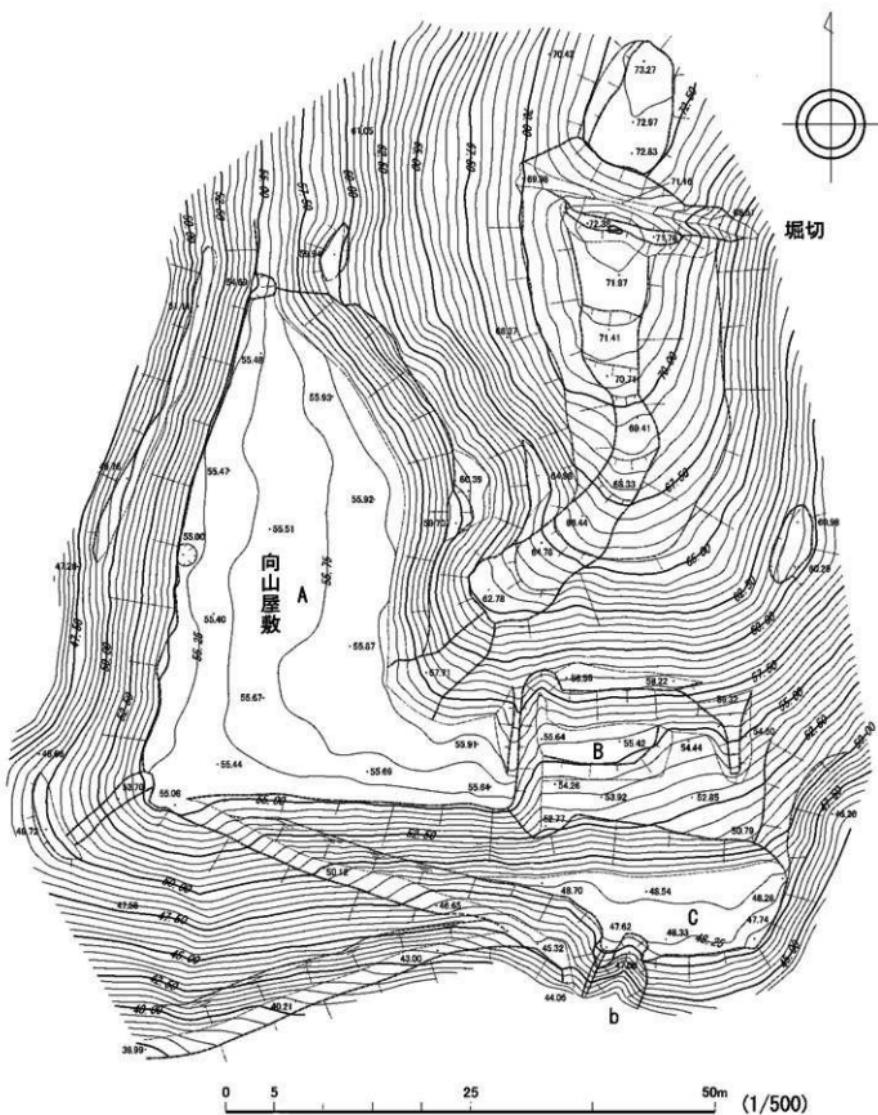


图 18 守山城跡 向山屋敷周辺地形測量図

第五章 地中レーダ探査

第一節 概要

富山県高岡市に所在する守山城跡(図19)は、松倉城(魚津市)・増山城(砺波市)と共に、「越中三大山城」と称されている。築城の時期は南北朝に遡り、十四世紀中期から十六世紀末期まで、佐々成政や前田利長の居城として使用されたと伝えられている。城郭の全容は明らかになりつつあるが、空濠や石垣、通路等が部分的に残っている。我々は非破壊の地中レーダ探査を用いた調査を行つており、本章では本丸地区と二の丸地区における結果を報告する。

探査装置は、Sensors&Software 社の NOGIN plus を使用し、周波数 250MHz のアンテナを用いた。探査結果の解析には、レーダ波の往復の伝搬時間と反射波強度を記録して、測定順に並べる鉛直断面図および、全測線での探査データをまとめて、深度毎の平面図を作るタイムスライス図を採用した。



図 19 守山城跡の位置



図 20 本丸での探査範囲と実施状況

第二節 本丸
本丸地区における探査の範囲と実施状況を図 20 に示す。北西側の観音像周辺に①～③、南東側の東屋周辺に④～⑥、入口周辺に⑦～⑧の計八箇所の探査区を設定した。各探査区では測線幅○・五mで探査を行つた。

一 観音像周辺の探査
 主郭で最も幅が広い、北西側の観音像周辺に、探査区①～③を設定した。図21には、探査結果から解析した、深度○・五～○・七五m（上図）と深度○・七五～1m（下図）の二つの深度範囲での平面図を示している。図では、レーダ波の反射強度を色で区別し、強い反射領域を暖色、弱い反射領域を寒色で表わした。
 上図では、観音像の周囲の花壇付近が、段差の影響により、強い反射領域となっている。下図では、北西端で強い反射域が広がっており、本丸の整地土を捉えた反応と考えられる。

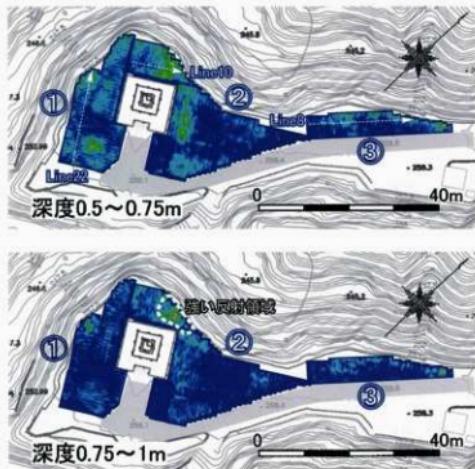


図21 観音像周辺の探査結果（平面図）

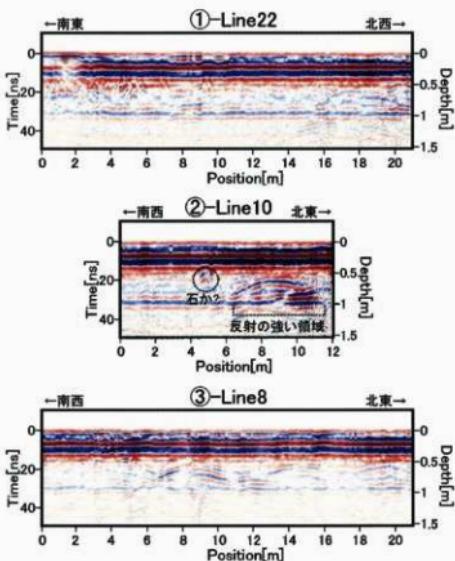


図22 観音像周辺の代表的な探査断面図

図22は、各探査区における断面図の代表例をまとめている。測線位置は図20に示している。各図では、縦軸にレーダ波の反射時間と深度、横軸には測線距離をとり、反射波の強度を、赤色（正成分）と青色（負成分）の濃淡で表わした。
 ①区の測線22の結果では、特に顕著な応答は得られていない。
 ②区の測線10では北東側（距離六～一二m）に強い反射領域があり、これは平面図でも確認されている。距離5m、深度○・五mでの異常な応答は、石の反応と考えられる。③区の測線8では、深度○・六m付近に地層の凹凸面があるが、城郭に関連する遺構の可能性は低い。

二 東屋周辺の探査結果

図 23 に、二つの深度での平面図を示す。東屋の近傍で、基礎コンクリートの反射が確認できる。また、(6)区の北東側に強い反射領域が広がっている。この領域は、北東下がりに傾斜しており（現地の傾斜は約一一度）、強い反射は、本丸の平坦面を造成した際の盛土による反応と考えられる。

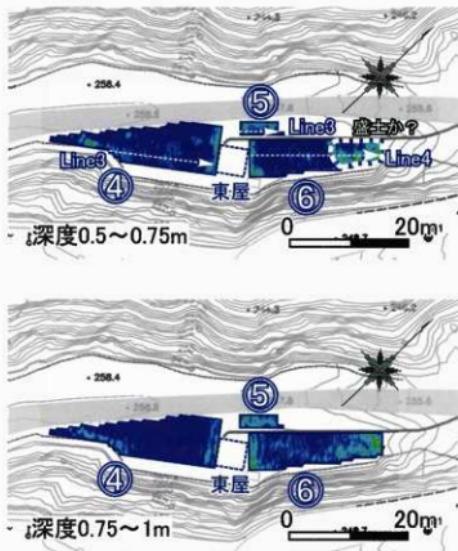


図 23 東屋周辺の探査結果（平面図）

図 24 には、図 23 の上図に示した 3 本の測線で得られた断面図を示している。(5)区の測線 3 では異常応答は無かった。(4)区の測線 3 では深度〇・七 m 付近に地層境界が認められる。この境界は点線の様に、両端から中央に向かって緩やかに落ち込んでおり、

三 本丸入口周辺の探査結果
本丸入口周辺には、主郭を区画する堀跡等が存在した可能性が考えられている。そこで、本丸へ繋がる斜面上に(7)区、下の平坦面に(8)区を設けた。図 25 に二つの深度での平面図を示す。深度〇・五〇・七五 m の結果では、(7)区の南西側に北東方向へ伸びる強い反射領域が認められた。また、(8)区の中央にも強い反射領域が連続して得られた。

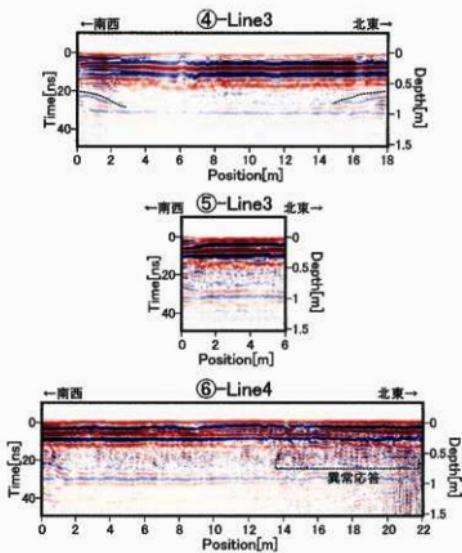


図 24 東屋周辺の代表的な探査断面図

窪んだ地形を示していると考えられる。また、(6)区の測線 4 では、距離一四〇～二二〇 m に異常応答があり、平面図で盛土と推定された範囲と対応している。

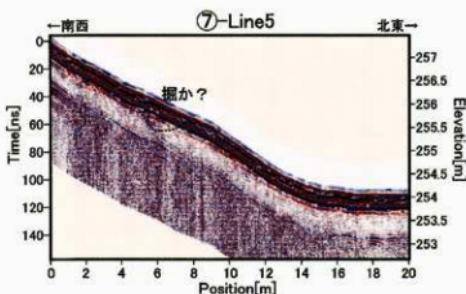


図 26 本丸入口周辺の代表的な探査断面図



図 25 本丸入口周辺の探査結果(平面図)

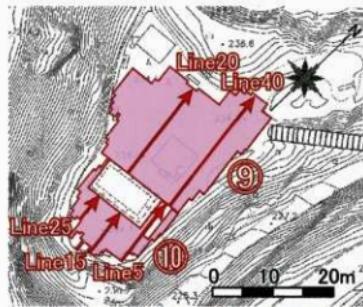


図 27 二の丸の探査範囲と実施状況

第三節 二の丸
図 27 の上図に、探査範囲と代表的な探査断面図(図 29、30)の測線位置を示している。北側に⑨区、南側に⑩区を設け、測線間隔〇・五 m で探査した。

図 26 は、代表的な測線での断面図を示している。⑦区の測線 5 は斜面であり、測線上の標高を用いて地形補正を施したが、距離 5 ～ 6 m、深度〇・五 m に塊状の異常が認められた。⑧区の測線 5 では、距離一九〇二二 m と二三〇 m に異常があるが、これは配管の反射であり、⑧区の平面図での連続する反射域とも対応し、人工作物の応答と考えられる。

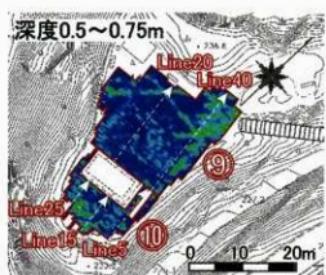


図 28 二の丸の探査結果（平面図）

二の丸の探査結果の平面図を図 28 に示す。上図の深度〇・五〇・七五 m の結果では、直線状の異常が多くみられる。これは探査範囲が以前、電波発信局であったため、地下に残る埋設ケーブルや配管の反応と考えられる。深度〇・七五～一 m では、⑨区の北東側で強い反射領域が広がっており、盛土を捉えた反応と考えられる。また小さな異常応答が複数あるが、石の反応の可能性が高い。

図 29 には、⑨区の代表的な測線の断面図を示している。深度約〇・五 m にある複数の放射状の反射は配管等の応答である。また下図の測線 40 の結果では距離一二 m に石と見られる反射があるが、人工物の反射の影響で不鮮明になっている。

図 30 は、⑩区の代表的な測線の断面図をまとめている。各断面図上では、人工物の反射は少なく、石と見られる反応（破線で示す）が複数箇所で確認できた。

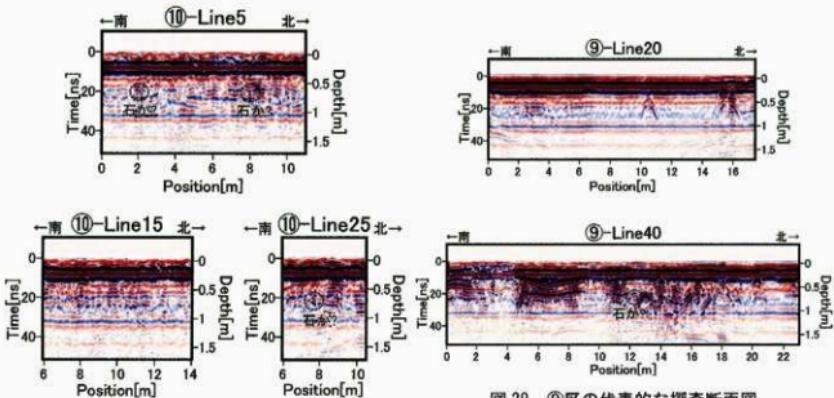


図 29 ⑨区の代表的な探査断面図

図 30 ⑩区の代表的な探査断面図

第四節 まとめ

守山城跡において、過去の城郭の様相を非破壊で調査することを目的として、地中レーダ探査を実施した。探査の結果、本丸では北西端（観音像裏）と北東端（本丸入口側）において、土質の異なる領域が認められた。これらは、平坦面を造成する際の整地盛土を捉えた反応と考えられる。また入口周辺の斜面では、堀状の異常が認められ、主郭を区画する空堀を捉えた可能性がある。他に、石と見られる反応も得られたが、城郭に関連するものかは不明であった。

二の丸では、北東側に強い反射領域があり、曲輪の周囲を巡る盛土と推察された。また、数箇所で石による応答が認められた。規則的な分布が得られなかつたため、建物跡の推定は困難だつたが、礎石を捉えた可能性が高い。

今後も地中レーダによる非破壊調査を行い、守山城跡の城郭の遺存状況や造成過程を検討し、城郭に関する有用な情報を得ることが望まれる。

（酒井英男、泉吉紀）

参考文献

- 酒井英男・田中謙次・D.Goodman 「考古学および雪氷学における地中レーダ探査法」『地質ニュース vol.537』一六・二三頁
一九九九年
- 岸田徹・酒井英男「小里城山城跡（御殿場跡）における地中レーダ探査」『小里城山城跡御殿場跡発掘調査報告書』八〇・八七頁
瑞浪市教育委員会 二〇〇五年
- 泉吉紀・岸田徹・酒井英男「地中レーダ探査による前田利長墓所の研究」『考古学と自然科学 Vol. 72』 日本文化財科学会

一一〇一五年

- 酒井英男・泉吉紀「第六章 地中レーダ探査」『高岡城跡詳細調査報告書』八四・九一頁 高岡市教育委員会 二〇一二年
- 泉吉紀・鈴木碧・酒井英男・野原大輔「千光寺の印伽藍における地中レーダ探査」『越中真言の古刹芦谷山 千光寺展』 八五・八七頁 千光寺展実行委員会 二〇一四年
- 中條利一郎・酒井英男・石田肇編『考古学を科学する』二九二頁
臨川書店 二〇一一年

第六章 関連城郭調査

第一節 概要

守山城は、城の規模が広大なこと、使用期間が長いことから越中三大山城として位置づけられている。しかし、守山城の城主によつて、さまざまな改修等が行われてきたと考えられ、それぞれの時期の評価を検討する必要があつた。そこで、富山県外の山城や前田家に関連する城郭を訪れ、守山城跡との比較や新たな史料について情報収集を行いたいと考えた。また近年、城を活かしたことづくりが盛んになつてることから、山城の保存と活用という視点で先行事例を確認し、守山城跡に活かせるようにしたいと考えた。

調査の方法は、現地の城郭を訪れ、各城郭の縄張図や地形測量図をもとに踏査を行い、各遺構について確認した。また、発掘調査の成果や保存・活用の状況などを地元教育委員会から紹介していただき参考とした。山城は、樹木が茂つてしまつて縄張を確認することができないため、なるべく春や秋の樹木が繁茂していない時期を狙つて調査を行つた。

二 調査の経過

平成二十五年度は、春と秋の二回に分けて関連城郭調査を実施した。春は、静岡県足柄城跡、東京都八王子城跡、滝山城跡、秋は石川県小松城跡、福井県袖山城跡で調査を行つた。

第二節 成果

天正十三年八月の佐々成政の降伏により新川郡を除く三郡が前田利長に与えられ、前田利長が守山城の城主となつた。その五年

後の天正十八年（一五九三）、秀吉は小田原城の後北条氏を討つため、関東へ進攻し、前田氏もこれに参陣している。小田原攻めでは、八王子城、滝山城を攻めていることから、関東の城郭を対象として調査を行つた。また、福井県の袖山城は、城と城下町のセット関係が、守山城と似ていることから、調査を行つた。小松城は、寛永十六年（一六三九）に前田利常の隠居城として新たに築造された城である。守山城の時代より新しくなるが、前田家に関係する城として、天守台が残存しており、守山城の石垣と石切丁場を考える上で必要であると考えた。

足柄城は、駿河国と相模国の国境に位置する足柄峠に位置しており、交通の要衝となつてゐる。中世城郭が築かれたのは、後北条氏の時代になつてからであり、天正十八年（一五九〇）の小田原戦役によつて後北条氏が滅亡するまでの、戦国時代中期以降において、北条氏の国境の城として重視されてきた。小田原城の出城として重要である。

八王子城は、北条氏の支城領主となつた氏康の次男熙照によつ



静岡県 足柄城跡 本丸部分



東京都 八王子城跡 御主殿跡

て築かれた城である。その構造は急峻な地形を利用した要害部と城主氏照の居館を中心とした居館地区、家臣団の屋敷跡や寺院跡の伝承地を含む根小屋地区、外郭の防衛施設群、そして現在の元八王子町一・二丁目に広がる城下町地区からなっている。

丘陵に立地する滝山城から、八王子城を新しく築き始めたが、天正十四年（一五六六）末以降、豊臣秀吉の来攻に備えた臨戦態勢をとりながら、急ピッチで築城工事が続けられた。しかし、天正十八年（一五九〇）六月二十三日、秀吉の命を受けた前田利家、上杉景勝に率いられた軍勢によって、一日にして落城している。発掘調査から、御主殿跡の礎石が検出され、国史跡に指定されている。現在は遺構表示を行なう整備している。

滝山城は、代々関東管領山内上杉氏の重臣として武藏国守護代を務めた大石氏によって築かれ、六代目の大石定重の時に滝山城の北に位置する高月城から移転してきたと伝えられている。城内の至るところに複雑な土塁や空堀を配し、自然地形をうまく利用した天然の要害ともいえる造りになつていて、発掘調査では、本丸虎口部分で石敷きが確認されている。現在は、国史跡に指定されている。

小松城跡の石垣には、加賀の戸室石と凝灰岩で構成されており、凝灰岩については、近くの山から切り出し、舟運で城に運ばれたと想定されている。

以上のように、小出原攻めに關係した城郭や城と城下町のセツト関係が参考になる城郭、前田家関連の城郭を踏査し、今後比較検討を進めたい。

（田上和彦）



東京都 滝山城跡 堀跡



福井県 桧山城跡 遠景



石川県 小松城跡 天守台

桜山城は、鎌倉時代末期の元亨元年（一二三二）ごろ、瓜生保の父・衡が越後の三島郡瓜生村からこの地に移り住んで築城したといわれる。以来、廃城までの約二五〇年間、越前の玄関口をおさえる要衝となつていている。本丸は標高四九二mに位置している。本丸北側には東御殿があり、東御殿北側の山麓には城主の居館があつたとされる平坦地があり、約一〇〇mの土塁が残っている。発掘調査では居館跡の礎石や土塁の石積みが検出されている。現状でも土塁の石積みは確認できた。桜山山麓の阿久和谷は、幅約五〇〇m、奥行き約4kmの小渓谷で、谷の入口は土塁と堀が内外を画している。谷の中央には百間馬場と通称される幹道が走つており、両側には武家屋敷があつたといわれている。国史跡に指定されている。

小松城跡の石垣には、加賀の戸室石と凝灰岩で構成されており、凝灰岩については、近くの山から切り出し、舟運で城に運ばれたと想定されている。

以上のように、小出原攻めに關係した城郭や城と城下町のセツト関係が参考になる城郭、前田家関連の城郭を踏査し、今後比較検討を進めたい。

第七章 総括

第一節 各調査成果

一 史料調査

今回は、守山城主であった神保氏張について焦点をあてて調査を行った。氏張に関する史料の収集とそれに関連付けて、神保家の墓について調査することが出来た。守山城を去った後の氏張について追跡することで、一城主の歴史的背景や生涯に迫ることができた。また、守山城は絵図の数が限られているが、近世の俳句集に描かれた守山城を分析すると、守山城の特徴をよく捉えている。今後、史料収集する上では欠かせない視点となつた。

二 測量調査

守山城跡の範囲については、先行して行つた範囲確認調査によつて、広域なものであることが判明している。守山城跡の主要部の測量編集に着手する前に、以前から重要性が指摘されていた向山屋敷について測量調査を実施した。測量調査によって縄張図の様相をより明確に表現することができた。広大な面積をもつ平坦面Aについては、向山屋敷の性格を考える上でも非常に重要な面Bを区画する土壙についても明瞭に確認できたことや、測量調査を通じて新たに確認した小平垣面の存在も成果として大きい。

三 地中レーダ探査

地中レーダ探査は、非破壊で地中の遺構等を探査できることから、発掘調査の計画を立てる上では、非常に有効な手段であると考えられている。今回の探査では、守山城の主要部である本丸と二の丸において探査を行つた。地中レーダ探査によって、本丸や

二の丸の造成等に関わる整地盛土や、空堀跡の反応を確認することができた。また、本丸、二の丸両地域で、石の反応と考えられるものが確認されたことが興味深い。これらは、規則的な配置は見せず、建物跡にある礎石であるとも考えられるが、現時点では可能性にとどめておきたい。地元の方から聞き取りを行つたところ、本丸、二の丸、三の丸は昔烟に使用されており、大きな石があつたが、それらは氷見側の崖に落として遊んだとされている。大部分の石については、消失しているかもしれないが、将来の発掘調査の計画に役立てたい。

四 関連城郭調査

平成二十五年度において五箇所の城郭を踏査することができた。立地や城下町とのセット関係、前田家と関連するかどうかなどさまざまな視点から守山城跡を見つめ直す良い機会となつた。また、城の保存や活用方法についてもそれぞれの地域での成功と課題を知ることができた。

第二節 今後の課題

範囲確認調査の成果が基盤となり、詳細調査を開始し、各調査からさまざまな成果が上がつてきていた。それぞれの成果をもとに、守山城の歴史的価値を少しずつ上げていきたいと考えている。測量調査では、測量面積の問題や山城特有の課題（視界の確保や樹木の伐採等）があることから、将来を見通した測量計画が必要であると感じた。また、史料調査では、基礎史料である古文書と絵図のリストを作成したい。一つ一つの課題を解決しながら、守山城の歴史的価値を明らかにしたい。

（田上和彦）

神保長職期						
同七	同六	同五	天正四	元龟二	同十二	同十一
一五七九	一五七八	一五七七	一五七六	一五七一	一五六九	一五六八
十一月、連龍が越中守に昇進する。 この年、連龍が氏張の妹を娶るという。	三月、謙信が急死し、その後織田方が越中へ進出する。 この年、謙信が急死し、その後織田方が越中へ進出する。	この年、謙信が越中國内をほぼ制圧し、守山城を降して能登へ進攻する。 この年、謙信が能登・加賀・越後を制圧する。	三月、謙信が越中國内をほぼ制圧し、守山城を降して能登へ進攻する。 この年、謙信が越中國内をほぼ制圧し、守山城を降して能登へ進攻する。	三月、謙信が越中國内をほぼ制圧し、守山城を降して能登へ進攻する。 うとしたが、小矢部川の増水により断念する。	十一月、神保長職が敵対する氏張の所領を没収し、これを阻む守山城を攻めようとしたが、越後で木庄氏の反乱が起きたため、放生津より撤退する。 （現高岡市北西部）へ兵を進め、小矢部川岸に陣取る。	十一月、増山城の神保勢が守山城の神保氏張を攻めるため、長職の本拠増山城を攻撃して降伏に追い込まれた。降伏に際し、能登島山氏（義綱）の仲介があつた。長職降伏の結果、守山城には能登島山氏の意向を受けた。
（3）戦乱に際し、城主が戦うことなく城を捨てるなど、城郭が内的要因により陥落すること。	（3）戦乱に際し、城主が戦うことなく城を捨てるなど、城郭が内的要因により陥落すること。	（3）戦乱に際し、城主が戦うことなく城を捨てるなど、城郭が内的要因により陥落すること。	（3）戦乱に際し、城主が戦うことなく城を捨てるなど、城郭が内的要因により陥落すること。	（3）戦乱に際し、城主が戦うことなく城を捨てるなど、城郭が内的要因により陥落すること。	（3）戦乱に際し、城主が戦うことなく城を捨てるなど、城郭が内的要因により陥落すること。	（3）戦乱に際し、城主が戦うことなく城を捨てるなど、城郭が内的要因により陥落すること。
田畠文書（『富史』II、二 史』II、一六三四号）	田畠文書（『富史』II、二 史』II、一六三四号）	田畠文書（『富史』II、二 史』II、一六三四号）	田畠文書（『富史』II、二 史』II、一六三四号）	田畠文書（『富史』II、二 史』II、一六三四号）	田畠文書（『富史』II、二 史』II、一六三四号）	田畠文書（『富史』II、二 史』II、一六三四号）
岡田紅陽所蔵文書（『富史』II、八五二号）及び上杉家文書（『富史』II、一七三六号）	上杉家文書（『富史』II、一八五九号）	上杉家文書（『富史』II、一八七九号）	上杉家文書（『富史』II、一八七九号）	長光寺文書（『富史』II、一六八七号）	坪坂文書（『富史』II、一六七八号）	乙川忠栄次所蔵文書（『富史』II、二 史』II、一六三四号）

前田利長期		神保氏派期					年号	守山城をめぐる動き	注記	出典	
同三	慶長二	同十二	同十一	同十	同九						
-	一五九八	一五八七	一五八五	一五八四	一五八三	一五八一	一五八一	前年越中へ派遣された織田の部将佐々成政が、守山城に一時在城したという。たまたま守山城を居城とした神保良住が失脚し、代わって成政が入城する。	越中古跡組記 信長公記 卷十五		
七月以前に廃城か。	守山城内に移転する。重臣の前田長種が翌年まで城に留まり、守将を務めた。利長が居城を富山城に移転する。	六月、氏派父子が佐々方から離反した阿尾城（現氷見市）を攻める。利家と戦端を開く。佐々方の守城は、氏派父子が四千余の兵を率いて守ったという。	八月、成政が徳川家康・織田信雄と結び、秀吉方の前田利家と戦端を開く。守山城は、氏派父子が四千余の兵を率いて守ったという。	八月、成政が秀吉に降伏し、新川を除く西部三郡が前田利長（利家の子）に与えられる。成政降伏直後の八月、守山城に入つた前田利家は国泰寺から方丈を接収し、城の書院に転用する。	八月、成政が秀吉に降伏し、新川を除く西部三郡が前田利長（利家の子）に与えられる。成政降伏直後の八月、守山城に入つた前田利家は国泰寺から方丈を接収し、城の書院に転用する。	利家と戦端を開く。佐々方の守城は、氏派父子が四千余の兵を率いて守ったという。	八月、成政が秀吉に降伏し、新川を除く西部三郡が前田利長（利家の子）に与えられる。成政降伏直後の八月、守山城に入つた前田利家は国泰寺から方丈を接収し、城の書院に転用する。	八月、成政が秀吉に降伏し、新川を除く西部三郡が前田利長（利家の子）に与えられる。成政降伏直後の八月、守山城に入つた前田利家は国泰寺から方丈を接収し、城の書院に転用する。	木森記 末森記 貞享二年国泰寺由来書上 （『加越能寺社出来』上巻）	越登賀三州志 放墟考 善徳寺所蔵文書（『富史』 III、五〇号）	

報告書抄録

ふりがな	とやまけんかおかしもりやまじょうあとしようさいちょうさがいほういち					
書名	富山県高岡市守山城跡詳細調査概報 1					
副書名						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	泉 吉紀（富山大学大学院理工学教育部 博士課程） 酒井 英男（富山大学大学院理工学研究部 教授） 高岡 徹（とやま歴史的環境づくり研究会 代表） 田上 和彦（高岡市教育委員会文化財課 主事）					
編集機関	高岡市教育委員会					
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路 7 番 50 号 TEL 0766-20-1463 FAX 0766-20-1667					
発行年月日	2015 年 3 月 24 日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査原因
もりやまじょうあと 守山城跡	富山県高岡市 東海老坂地内	016202	202090	36° 47' 13"	137° 0' 33"	学術目的調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
守山城跡	城館	中世 ～ 近世	郭、堀切、堅 堀、石垣	珠洲、越前 土師器		
要約	守山城は、増山城（砺波市）、松倉城（魚津市）とともに越中の三大山城として広く知られ、富山県を代表とする山城である。守山城は、14世紀半ばの南北朝期から戦国期を経て、16世紀末の近世初頭に至るまで使われた城といわれる。この間は約 250 年の長きにわたり、改修や整備が繰り返されたとみられる。平成 25 年度から守山城跡詳細調査を開始し、測量調査や史料調査、地中レーダ探査を行ってきた。 守山城跡における基礎資料の蓄積について概要報告を行う。					

守山城跡詳細調査概報1

発行日

平成二十七年（二〇一五）三月二十四日

編集・発行

高岡市教育委員会

〒九三三一八六〇

富山県高岡市広小路七番五〇号

電話番号（〇七六六）二〇一一四六三

印

刷

小間印刷株式会社

富山県高岡市利屋町三番地

守山城縄張図(主要部)

(作図 高岡 勝)

註

1. () 享永5年(1662)前田安藤の越後守山城の山頂に記入された城名。
2. □ 伊利正一氏より開きとりした地名。
3. —→ 南北通路の方位を示す。
4. ······ 断壁溝(大手登城道)のルート(一部推定)。
5. A~K 部
6. 1~7 場切

